

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 川端康成 『禽獣』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 175 回のツイキャス読書会の課題図書は、川端康成の『禽獣』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『禽獣』 感想文

「《名詞》禽獣(きんじゅう)意味 鳥と獣。一般に、人間はこの範疇に含まれない。また、しばしば「道理を弁わきまえない存在」「野蛮な存在」の象徴として用いられる。「禽」は「とり」の意。」 ウィクショナリー日本語版より

何が悲しくて初川端が、こんな変態小説。

やられました。褒めてないです。

御大も生前はこの作品が嫌いだったようで黒歴史作品ともいえるのか。

wikipedia によると何でもこの作品

-----川端は、昭和九年に発表された「文学的自叙伝」において『死体紹介』や『禽獣』は、「できるだけやらしいものを書いてやれと、いささか意地悪まぎれの作品であって、それを尚美しいと批評されると、情なくなる。」と書いている。-----

なのですよ、既に何をかいわんや。

どうしたものかとググっていたら[丸尾末広著『少女椿』評した blog](#)に

(引用はじめ)

-----この小説(『少女椿』)の本質はグロイ描写ではなく、道徳や倫理をいともすんなりと飛び越え、差別、偏見と真面目に、そして不真面目に向き合う作者のアナーキズムにあるように思えます。-----

(引用おわり)

という一文を見つけました。

これだ、禽獣の内容「道徳や倫理を飛び越え、"真面目に不真面目に向き合っている"」んだ。

主人公に関しては物語が始まってしばらくの未亡人鳥のカゴに突如別の番を突っ込む行為からして「え？ こいつキチなの？」と嫌な予感しかしなかった。

可愛がるくせに死んだら埋めてやるでもなくゴミ箱ポイする

この人格のとっ散らかり加減といったら。

無自覚に「真面目なつもりで不真面目な野郎」なのでこちらは「ザケンナ！ クソが」な気分になってきます。

「動物の生命や生態をおもちゃにして...畸形的に育てる」ことを
「悲しい純潔・神のような爽やかさ」って、もうね壊れた自己陶醉で本当にアナーキー。

物語の中の主人公もまた自宅内では「道理を弁(わきま)えない野蛮な存在」なの。
他の感想を見ていたら「主人公はペットに君臨する神的存在」と書いてあるものもあり
そうか、神様は清濁併せ飲んだ野蛮な存在でもあるのでそういうことかと妙に納得したりして。

千花子を見つめる主人公のまなざしは「少女愛」者だったという川端自身の目にも思える。

全編通じて状況がまざまざと思い浮かぶ様はさすが文豪川端康成。

そして「ああ、気分悪かった...」という事で気がつくともんまと川端氏の術中に陥ってしまっていたわけなのでした。

その他、ツッコミどころ満載なわけなのですがキリがないので取り敢えず 10代で読まなくて良かった。

最後に、菊戴様、こんな愛くるしい小鳥がいるのを知れたのは良かったです。

(おわり)

参考記事 少女椿 <http://fractal-ihl.sblo.jp/article/52512934.html>

『禽獣』 読書感想文 恩師編1

「禽獣」は自宅に有ったので、読んで感想はあるのだが、
題名だけで嫌な事を思い出してしまったので書きたい。
「恩師」がどういう理由で恩師であるのかを思い出した。
前半は嫌な話で始まるが、最終的には良い話になるので書かせて頂きたい。
一回で収まらないので、次々回の「弟子」の感想文で完結します。
中学校に入学してすぐに
「しつけに関しては軍隊式で指導するのやむを得ないのが我校の方針だ」
と学校側から通達された。
その年の卒業生が学校の窓ガラスを片っ端から破壊して去っていった、
事が理由だという。
口紅をつけて卒業式に参加した女生徒もいたからだという。
一年生である私達のほとんどが反抗的な生徒ではなかった。
しかし学校側の高圧的な姿勢により反逆的になっていった友人は多かった。
部活動も強制的であり、
文化系の部活でさえ教師による「しごき」というか「教育的指導」が行われた。
入学して半年で1クラス分、
つまり40人ほどの生徒が登校拒否に追い込まれた。
その中にはどうやら自殺してしまった者もいたようだ。
詳細は明らかにはされていない。
表面上「体罰」は許されていない時代になっていたのに、
もっと陰険な手段が「指導」に用いられることもあった。
授業中でも教師達は怒鳴りまくった。
生徒達に、特に何の問題もないときでも定期的に大声で怒鳴られた。
後に高校へ入学した際に、他の学区の中学校出身者に聞いたところによると、
「市内の中学校では組織的な万引き行為を計画的に行う」者達がいたということだ。
私の中学は「市外」で商店もあまり無く、素朴な生徒が多かったが、
そういった犯罪行為を教師達は警戒していたのだろう。
下校時に商店に立ち寄ることは「禁止」されていた。
運動会、修学旅行、卒業式などは
「しつけ」の絶好の機会であったので、
3か月前から「練習」させられた。
体育館の床にテープを貼って新幹線に迅速に乗る為の訓練が行われた。

(おわり)

ある資産家の邸宅

今回も難しい作品を課題図書にさせていただきありがとうございます。

私はこの作品の中心人物であり、動物を玩具にする彼と仲良くできそうにないと感じた。まあ、その前に彼は男の友人などいらぬだろうが。

私は玩具という言葉から法華経のなかの、ある資産家の家が家事になり、家の中で何も気づかず恐がらず「火事だ！危ないから逃げなさい！」と言っても、火事ってなんのこと？それって美味しいの？と全く動こうとせず遊び続ける20人の子供達に対して

「楽しくて、レアで、バエる牛と鹿と羊の玩具の車をあげるよ」
と言う方便を用いて外に出させたと言う信解品を思い出した。

火事に遭っている邸宅は大きな苦しみと迷いに包まれた欲界、色界、無色界からなる、衆生が生死を繰り返す迷いの世界という三界の喩えらしい。

火が燃え盛る家の中で平気で色・声・香・味・触で遊ぶ、絶望を意識していない絶望の子供達のいる世界に私もいるのだ。

その中にいる、聞く耳すら持たない人たちも皆等しく救うのが法華経などの大乘仏教の思想で、それはきっとキリスト教でも言っていることなのだろう。

燃える家から出てきた子供達全員に牛や鹿や羊の玩具の車ではなく、白い牛が繋がれ、多くの侍者を従えた車が与えられたそうだ。

彼や私にも生きていうちに救いはくるのだろうか。
或いは生きていると思っ込んでいるだけなのかも知れないが。

信解品の資産家の家の中にはハゲワシや鳩や梟や他の鳥、毒蛇やネズミ、サソリも棲んでいる。

狼が人間の死体を喰い、犬やジャッカルは飢えて互いに喧嘩して吠えあっている。

獰猛なヤクシャ(夜叉)は人間の死体を切り裂いて食うし、瓶のような陰囊を持つクバーンダ鬼達は犬を仰向けにマウンティングしニヤニヤ笑っているらしい。他にもまだまだいるらしいが書きたくないし、皆様も聞きたくないだろうからやめにする。

とにかく不要不急ではないけれど、そんな三界から私は願わくば彼と違い、女を連れずに一人解脱したいと思ったのだ。

(おわり)

『禽獣』 川端康成 感想文

この作品は、人間の「非情」「冷酷」「狡猾」を作者自身を通して表現していると思った。

鳥の死骸、犬の死骸をゴミ箱に捨てる、この行為の時点で私には全く無理かなと思いながらも、細かい描写に主人公の自己嫌悪や人間に対しての警鐘も含まれているのかなと感じながら、読み進めた。

主人公の孤独、人間に関わるのを酷く嫌っているように見える。

「小鳥の来た二三日は、全く生活がみずみずしい思いにみたされるのであった」「人間からはなかなかそのようなものを受け取ることができない」

「造化の妙」(P.149)

つまり、小さな小鳥の中に「万物を作り出し育てること」の道理を見ることが出来るということなのだ。美しい小鳥を誰かと一緒に見たい。

そこには、重い尊い命がある。しかし玩具のように扱う。

「鳴鳥として見込みのない雛をすてた」(P.152)

彼はこの雛をも助けるのをやめる。

子犬の間引き、人間の利己的な行為。

人間は面倒くさい、夫婦、親子兄弟、孤独な彼の勝手な考えを見る。

(引用はじめ)

「動物の生命や生態をおもちゃにして、一つの理想の鑄型を目標として定め、人工的に、畸形的に育てている方が、悲しい純潔であり、神のような爽やかさがあると思うのだ。良種へ良種へと狂奔する、動物虐待的な愛護者達を、彼はこの天地の、また人間の悲劇的な象徴として、冷笑を浴びせながら許している。」(P.153)

(引用おわり)

私には、「神のような爽やかさ」も、悲しい純潔も全く理解できない。

やめたくてもやめられない良種へのこだわりも、虐待的な行為も、引用文は彼と作者自身の自己嫌悪と後悔を表している文章であってほしい。

しかし、この様な過程を経て、生まれでた鳥を犬を私達がお金で買っているのだから、私達も冷笑者なのである。恐ろしい。この作品はが書かれた時代より更に今は酷くなっているにちがいない。

主人公も冷笑者であり実践者なのであって、それはまさしく作者自身であり作者の苦悩であると思う。

テリアと木兎を抱いた川端の写真を見た。

「鳴鳥として見込みのない鳥」、それは「子供の出来た千花子」なのかもしれない。

彼は良種な舞踊家を造ろうとしていたと思う。心中しようと思った女性だった。

「生きているとは言えないような」ぼんやりした人任せな千花子だったら心中の相手にふさわしいと。

太宰を思い出す。

その身勝手な思いと行為が最終的には

「ありがたく思いつづけねばならない」と、千花子を再認識させる何かを見い出させる。

最後のシーンは、元の伴奏弾きの亭主の言葉に張り合う彼を見る。

千花子は大事な存在だったのである。

小さい時から鳥も飼い、犬も最後まで看取った。その愛らしさ、家族のような大切さを感じていた私にとって、この小説は非情な世界であった。

また孤独との向き合う難しさをしみじみ感じた。誰もが抱えなければならない孤独。人ごとではない。

純血種を望む愛犬家は多い。お金の為に生きる力のある生きたい動物が犠牲になる。

消費される動物を作り出す社会に身を置いている私達の責任まで突きつけられた作品だった。

「六月の木の花の悩ましい匂い」

「こんな狭い水中にも微妙な光の世界がある」

「初恋の恋人のように眠る小鳥」

「たらいに散ってきた藤の花」

美しい川端の文章、その映像が風が匂いが、優しい空気を運んでくれた。

非常に悪辣な「犬屋」と対照的に。

(おわり)

「菊戴って可愛いな」

菊戴という鳥があることを初めて知りました。

名前はそんなに可愛くないですが、小さくて愛らしい。きっと鳥や動物が好きな人なら飼ってみたい気持ちになるんだと思う。

私は動物が苦手なので、写真や動画を見るだけで十分ですが、自分のモノにしたいと思う気持ちも分かります。

餌をあげたりして懐いたりしたら、きっとたまらなく可愛くて、癒されるのだと思います。

でも、ちゃんとお世話しないとすぐ死んでしまう。

人間みたいに言葉を話せないから、何だか分からないうちに死んでしまうのだと思う。

自分の事で精一杯の私は、何か動物を育てようとかいう気持ちもなく、もちろんお世話をする自信もなく、この作品の主人公のように無慚に殺してしまうのだと思う。

面倒くさいから、動物を飼うという気持ちにならないのかもしれない。

この作品を読んで、ますます動物を飼うのは嫌だなと思ってしまったのですが、それは動物が死ぬのが嫌というより支配する感じがどうなのかな？と考えさせられました。

かと言って、大切に育てて家族のようにになっている動物もいるし、捨てられたり、保護が必要な動物を育てている人もいる。なんだかよく分からなくなりました。

作者の川端康成は、何を伝えたかったのか？ よく分からなかったので、読書会で少しでも理解できれば良いなと思いました。

(おわり)

邪悪なあんちくしょう

禽獣は動物に囲まれて暮らしている独身男の主人公がかつての愛人である千花子の舞踊会に行く車中で、自分の飼っている動物たちを思い起こす話だ。

始めは葬式の渋滞から始まり、数々の動物の死や自殺未遂の話と始終、死について書かれており非常にぞっとさせられた。

そもそも彼は、ろくでもない人でなしであり、まさしく禽獣にも劣る存在だ。

一見、沢山の動物に囲まれていて「それ」らを愛しているように見えるが、ただ「それ」らは自分の寂しさを紛らわせるだけの道具に過ぎない。

ペットたちは名前も与えられず、気まぐれに世話をされ気まぐれに殺される。

死体となればすぐに興味を失い、ゴミとして廃棄してしまう。立派な庭付きの家があるにも関わらず、墓の一つも建ててやらないし、手も合わせない。

彼はそれらの一種残酷な行いを気にも留めず繰り返している。邪悪な存在だ、と思った。

唯一彼が名前をきちんと呼ぶのは千花子だけだ。

彼にとって千花子は何であったのだろうか？

愛する対象であったのか？それとも自分を着飾るファッションだったのだろうか？

私には彼の一番お気に入りのペットとして扱っているようにしか感じられなかった。

彼は千花子と一緒に自殺しようと提案する。

それはきまぐれの嘘であったが、その中で彼女のしぐさの中に彼は虚無を見出す。

(引用はじめ)

彼女は彼に背を向けて寝ると、無心に目を閉じ、少し首を伸ばした。それから合掌した。彼は稲妻のように、虚無のありがたさに打たれた。(P.172)

(引用おわり)

彼は、彼女の虚無の中にある魂の清らかさに驚いたのではないかと思う。(白痴の美しさに通ずるものを感じました)

彼は楽屋で化粧をしている千花子の中に合掌しているときの姿を思い出し、たじろぐ。

彼の邪悪さを無意識に自覚させられてしまうために、彼はたじろいだのではないだろうか？

そして、彼女をこれまで廃棄したペット同様、死んだ者のように扱い、最期には遺稿集の言葉で表現し拒絶したのではないかと思います。

私も、彼と同じように無感情に命を扱っていることが、あるかも知れない。

たしかに効率だけを求めるなら、死んだペットや死んだ人間に関わりあっている暇なんてものは、ない。

だけど、その暇こそが人間性ってヤツじゃないかと思う。

(おわり)

『死になれる恐怖』

私は死や死骸になれるという感覚が怖ろしくてたまらない。しかし、主人公は死や死骸を自然に取り込んでいるように思えた。

(引用はじめ)

「——彼も女中も捨てることを怠っているほど、もう小鳥の死骸にもなれてしまったのである。」

新潮文庫(P.146)

他にも、飼い犬が新たな生命を生み出し、その子犬が生き延びられずに死んでいく様子を突き放して眺めている様子は薄気味悪かった。戦中の兵士が人を殺めることや仲間の死や死体に鈍感になっていくように、死になれることは不可思議なことではないのだろう。私も例外ではないのかもしれない。

私事だが、先日、冬の間に荒れてしまった畑を鍬(くわ)で掘るように耕しているときに事件が起こった。冬眠中の蛙を物の見事に真っ二つに切り裂いてしまったのだ。体は分断され流血しながらも、ピクピクと揺れ動き続けている。ギョツとして凝視してしまう。やがて罪悪感で一杯になった。

普段から見慣れており、切ってしまうと金太郎飴のようなミミズを切り裂くのとはわけが違う。蛙の殺生は死のリアリティを一層感じさせた。いたたまれない気持ちを抱えながらも、思わず農具置き場の近くに小さな穴を掘り、まだ微かに動きのある蛙を埋めて墓を作り、水をかけ、最後には合掌していた。何をどう祈っていいかもわからず、数秒間、無心に手を合わせただけだった。咄嗟の弔いは蛙の為でもあるが、無論自分のためでもある。死に対する畏怖と殺生をした罪悪感からだろう。

上記のような感覚とは違って、現実から離れたところに浮遊しているような主人公の眼に映る死は、畏怖というよりも親しみだったのかもしれない。千花子との心中未遂で見出した死への美的感覚や憧憬、また、飼い犬や鳥の生死を積極的に取り込んでいくあたりは、現実感のない主人公の生き方をなぞらえた白日夢そのもののように思えた。生きているのか死んでいるのか、現実なのか夢なのかが曖昧に溶けあっているのはっきりしない。読了後、死に親しみを感じているように見えた主人公が死神のように見えてしまい、私は思わず文庫本を身から遠ざけてしまった。

(おわり)

『彼』

伊豆の踊子で、再生されは私の自我はどこへ向かう？

「愛情の差別をつけるくらいならば、なんで動物と暮そうぞ。人間という結構なものがあるのに…」彼はわずかな欲目を憎み、薄情な女中と動物と暮らす。

悟性と構想力の中の趣味に戯れ「美」に対する理想を「人工的」な空間に構築する彼。

新しい小鳥が来た日には生活がみずみずしい思いで満たされる一方「自然的」な人間からはそのようなものを受け取ることが出来ない彼。

山からくる雛鳥の差餌の為ろくに外出もせず、雑種の仔犬を呆気なく捨てる一方で菊戴を懸命に看病する彼。

「生命」に対し感情をもたず、美のお眼鏡にかなわぬ「物」を玩具にし、理想の純潔に生きる動物虐待的な愛護者を、彼は「人間の悲劇の象徴」として許す。

一見して究極のエゴイストのようである彼だが、良種へ改良された鑄型のティーカップ・プードルを神のような爽やかさで愛玩する我々と何か本質的に違いはあるのか？

グロテスクなりアリティを感じる…

川端はこの小説を書くに辺り三人称のような「彼」を選択した。それにしても、あの突然すぎるオチの凄まじさといったら！

- ① 私は驚かされた
- ② 彼は驚かされた

これでは言葉への距離が全く違う。小説家って、言葉の奥にある人間の心を摘発する悪魔のようだ。それぐらいの業があつてこそ小説を書く必然に至る訳だが、そんな川端先生でもこの小説を書くに辺り一人称を使うことを躊躇われたか？ しかし彼とは誰か？ 人間は十で禽獣、二十で発狂とも言う。川端康成は人間の心の奥に隠蔽された自我の一部を魔界から人界へひっぱりだし、我々に現わして見せるのだ。

(おわり)

※ 十で禽獣、二十で狂人云々は、岡倉天心『茶の本』第六章からの引用でした。

『 白昼夢と死化粧 』

幼少時、黄緑色のセキセイインコのつがいを飼っていた。

名前は、鳴き声から雌のピピと雄のポポ。

ただ、同じ見た目のピピとポポは見分けがつかなかった。

ある日、ベランダで日光浴をさせていたときに、鳥籠から逃げてしまう。

私は、母親に「どっちが逃げちゃったの？」と聞くと、母親も首をかしげながら「たぶん……ピピじゃない？」とあてずっぽうだった。

それからは、ピピが逃げたことになった。

幾日か待っていたけど、戻ってこなかった。

この小説の「彼」が飼っていた菊戴のつがいのように、元気だったポポはピピが逃げ出した後、しばらくして鳥籠の底に静かに横たわっていた。

羽をそろえて、目をつむって…… おだやかな死に様だった。

ポポを庭に埋めながら、ふとピピが逃げた瞬間を目撃したわけでもないのに、鳥籠では広げられなかった羽をはばたかせながら、ピピが空の向うへ飛び立っていく様子が脳裏に浮かんだ。

その時の感情は、幼い当時は言葉にできなかったが、明らかに「虚無」だった。

あんなに可愛がっていた(と思い込んでいた)のに……。

毎日、話しかけていたのに……。

ピピは、そんな煩わしい感情など微塵も飼い主から受け取っていないというのに。

人間同士だと、相手に思いをかけてしまうと何かしらの「意味」が生まれてしまう。

その煩わしさを避けた結果が、「彼」が千花子との心中の時に感じた「虚無のありがたさ」(新潮文庫 P.172)のような気がした。

手はかけても、思いはかけない。

それが「彼」の禽獣たちとの向き合い方であり、人間関係からの自己防衛なのだろう。

きっと、煩わしい人間たちの中でも、千花子には「虚無」を感じる事ができたからこそ、忘れられなかったに違いない。

だから、そんな千花子が結婚をし、出産し、ある意味人間として「充実」すると、「彼」には彼女の舞踊が「彼女の肉体の力がげっそりと鈍って見えた。」(P.160)

結婚前の千花子の舞踊には「肉体の野蛮な退廃に惹かれた。」(P.160)のは、肉体ではなく「精神」のことを指しているのだろう。

対照的に、千花子の離婚した夫は「やっぱり、千花子の踊は抜群ですね。いいですなあ」(P.174)とのたまう。

何のきらいもなく、千花子に思いをかけた人間の素直な言葉に「彼」は「自分もなにか甘いものを見つけなければ、なぜだか胸苦しくあわてた。」(P.174)とするが、所詮みつけれない。

なぜなら、浮かんだ言葉が「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し」(P.174)だからだ。

十六で死んだ少女の死化粧を花嫁の化粧となぞらえたところは、結婚の実体がないまま、清いままで死んだ少女の「虚無」を表しているような気がするからだ。

実体のない白昼夢から目覚め、実体のない死化粧に思いを馳せる……。

「彼」にとっては「虚無」こそが実体なのかもしれない。

幼い私は、ポポであろうセキセイインコを土に埋めながら、なぜ見分けがつかなかったのかを考えていた。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

「禁じられた遊び」

「それにしても、なぜ自分は咄嗟(とっさ)に扉の陰に隠れたのかしら」(P.173)

なぜ、彼は、咄嗟(とっさ)に扉の陰に隠れたのか？ その答えを考えてみた。

この主観的な配置・編集・構成による因縁・因果の説明、これを、「見立て」という。とりわけ、禅は、最高の智慧である「空」、つまり、一切の因縁因果(法)の否定を、公案による修行などで学ぶ。その修行のために「見立て」を駆使して、それを否定していくプロセスにより「空」を悟るのだ。

鎌倉室町以降の能楽、茶の湯、俳諧のジャンルは、禅の「見立て」をとりいれて、日本文化を深化させた。換骨奪胎とは、もとは、禅の用語である。凡骨を仙骨にするのが換骨だ。ひいては、古の形式を自分流にアレンジする意味となる。これも「見立て」の一種だ。

川端は、「見立て」の達人だ。何層もの「見立て」で作品世界を埋め尽くしていく。彼が、「新感覚派」と呼ばれたのは、「見立て」の奇抜さゆえである。

『禽獣』は「見立て」を駆使しながら、彼と千花子の因果を語っている。

『山門不幸 津送執行』 禅寺の住職が遷化して、空に鳥が解き放たれる。「放鳥」は、死者のために、禽獣を自由にして、殺生の罪を贖うための「見立て」である。その鳥たちの鳴き声に白昼夢を破られてから、葬式に出くわすと縁起が良いという、易学思想の「陽極まれば陰生じ、陰極まれば陽生ず」の「見立て」が重ねられる。それが、千花子との心中未遂のシーン、さらには、末尾の千花子の死化粧まがう化粧シーンへと続き因果がめぐっていく。

放鳥や葬式も、それぞれの「見立て」の材料である。菊戴の死は、「見立て」をもたらした。その「見立て」は、事実によって裏打ちされていく。わざわざ千花子の舞踊会に出かけるのは、「見立て」の答え合わせのためである。

押入れの中で死んでいる菊戴の番(つがい)の死骸。その前に死んだ三羽の菊戴。心中しようとした時に千花子が見せた、真夏の午後の合掌。その姿に感じた「虚無のありがたさ」、そして、菊戴が、幼い初恋人同士のように毛糸の鞠の姿になって、眠っている姿。これらのシーンが「見立て」として配置され、複雑なレイヤー(層)を構成し、因果を織りなし、ひとつの世界観として文章の中に立ち現れる。

千花子が、縛ることを求めた足は、水浴して濡れ、火鉢で足を焦がしてしまった菊戴の足に「見立て」られているのは、何度も読むとわかるだろう。

川端が孤児であることが、彼に「見立て」のなかで寂しさを紛らわすことを教えたのか。しかし、いくらなんでも、死を「見立て」るのは、禁じられた遊びである。

では、なぜ、彼は、咄嗟(とっさ)に扉の陰に隠れたのか？

舞踊会の楽屋で若い男に化粧させている千花子の姿に、押入れに死んでいた、菊戴の番が、甦って、毛糸の鞠のように、睦みあっているという「見立て」が重なったことではないか。

楽屋を垣間見ての、菊戴の番死骸が甦って、彼の眼前に現れたような、因果関係の報いの感覚が、彼を咄嗟に扉の陰へと隠れさせたのだ。それは、非倫理的な白昼夢を咎められたかのような衝撃だったろう。

『小鳥の鳴き声に、彼の白昼夢は破れた。』(P.144)

実は、この一文が大変重要だ。

その白昼夢が破れた冒頭シーンで既に、禅でいうところの因果関係の否定である「空」への直観が、暗示されている。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343